



巻頭言

情報バリアの解消に向けて

財団法人 日本植物調節剤研究協会 会長 小林 仁

近くに住む小学5年生の孫に縄をなって見せたのがきっかけで、最近、孫の通う小学校で「ゲスト・ティーチャー」を体験した。「総合的な学習の時間」を活用した「農業の体験学習」の一環ということで、2回にわたる農業の話と草履作りの実技指導に参加したのである。孫や担任の先生に請われるままに、軽く引き受けてしまったものの、作り方の一部がどうしても思い出せなくて苦労した。幸い一緒に参加した名人おばあちゃんのおかげで、どうにか責任を果たすことはできた。実技の時間が終わる頃には、子供達は草履の作り方をほぼマスターして、かわるがわる完成したばかりの草履を誇らしげに見せにきてくれた。子供たちの熱心さや、のみ込みの早さには感心させられるばかりであった。

さて、後日談になるが、我が家ではその後予想もしていなかったことが起きた。孫にとっての自分の権威が急上昇し、いい関係が確立できたのだ。孫の言葉使いは丁寧になり、私の体験談もよく聞くようになった。年齢差の大きさや近親者間同士ゆえに生じていた情報伝達のバリアが、一気に取り払われたような気分である。言うまでもなく原因は上記の出前教室であり、改めて情報伝達の「場」の重要性について認識させられた。それと同時に、私は孫やその友達にはかなり頻繁に接し、話もしてきたのに、縄のない方ひとつ伝授していなかったことを反省させられた。私だけでなく、近所の子供達の祖父母たちについてもそれは当てはまるらしい。たとえ豊富な人生体験や貴重なノウハウを発信できる者が近辺に大勢いたとしても、学校のような「場」がなければ肝心なことは伝わらない。逆に、情報授受に適した「場」が設定できれば、

どんな種類の情報でもバリアを乗り越えて伝えることが出来そうである。これは特に目新しいことではなく、〇〇ミーティングとか〇〇学校などと称して、各所で幅広く実施されていることだ。これらの「場」では聴衆がひとつの目的を持って集うことが多く、比較的容易に情報を伝達することが出来る。しかし問題は、世代、思想、文化といった、価値基準を育んできたものが多岐にわたる集団を対象とし、互いの情報の授受態勢が必ずしも整ってない場合である。例えば、農産物や農薬使用の安全性のように五感による認識が困難な内容を説明する場合に、どのような「場」の設定が有効であろうか。不安や危機感といった人間の根源的な感情とリンクしているテーマでは、たとえ冷静で科学的に情報発信をしようとしても、受信側の姿勢や能力に問題があれば「場」は成立しない。姿勢が整わなかったり、受信能力が無い場合には、入場を遠慮してもらうか退場してもらうこともある。また、受信能力が不十分な「場」では発信内容に関連した知識や情報を提供して受容力を高めておくか、受信能力に応じた情報の発信を工夫しなければならないだろう。さらに、群集心理に起因するネガティブな影響が予見されるような場合には、それに応じた予防措置を講じる必要がある。

以上は、私の最近の体験から出発して到達した情報バリアを解消するための試案である。

本格的な情報化時代を迎え、各所に存在する情報バリアの解消が社会的課題になっている今こそ、最適な「場」の検討が問われているのではないだろうか。